森の木々のそよぎに歴史の息吹を感じる

響き渡る 義仲軍鬨の声

およそ八〇〇年前の　春の夜半
源義仲が
角に松明をくくりつけた
牛の群れを先頭に
この山路を駆け抜け
平家十万の大軍を破った
ここが源平の戦に名高い
『火牛の計』を策した
古戦場である。

万葉の心

越中の国守
大伴家持が京を想い
芭蕉が旅したくりから峠
木々の梢をゆらす風に
耳を澄ますと
いにしえの夢の声が聞こえてくる

The resounding battle cry of Yoshinaka's army was heard one spring night 800 years ago.
Yoshinaka Minamoto tied flaming torches to the horns of a herd of bulls and sent them ahead along the mountain road,routing the 100,000 men of the Heike army.
This is the ancient battlefield which was the scene of the famous Åeflaming bullÅf strategy in the battle between the Genji and Heike clans.

●源平砺波山合戦絵図（石川県津幡町竹橋・倶利伽羅神社所蔵）
Illustration of battle between Genji and Heike clans

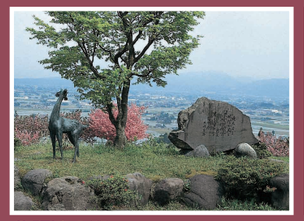
くりから古戦場 県定公園
KURIKARA BATTLEFIELD

●日本最大級の源義仲騎馬像（埴生八幡宮）　Statue of Yoshinaka Minamoto mounted on hishorse, one of the largest statues in Japan

●火牛の像　Statue of flaming bull
くりから古戦場猿ヶ馬場のすぐ近く、角に松明をつけた牛が今にも突進しようとする姿に、源平合戦の情景が目に浮かぶ。

源平盛衰記より

『四、五百頭の牛の角に松明を燃して、平家の陣に追入つつ……鬨を合せ喚叫、黒坂表へ押寄る、前後四万余騎が鬨、山も崩岩も摧らんと夥し、道は狭し、山は高し、我先々々と進む。平家は両方の中に取籠られたり。戦は明日ぞあらんずらんと取延て思ひける上、如法夜半の事なるに、俄に時を造懸たれば、これは如何せんと東西を失ひ、周章騒、弓取者は矢を取らず、矢をば負共弓を忘れ、冑を著て甲をきず……馬には逆に乗て後へあがかせ、或は長刀を逆に突て、自足を突切て、立あがらざる者有ければ、踏殺され蹴おさるる類多し。闇さはくらし案内は知らず、如何すべきかと方角を失へり。搦手雲霞の如くなり。追手上が上に攻重りければ、先陣後陣に押あまされて、道より南の谷へ下る……父落とせば子も落す。主落せば郎等も落す。馬には人、人には馬、上が上に馳重て、平家一万八千余騎、十余丈の倶利伽羅か谷をぞ馳埋ける。適谷を遁る者は兵杖を免れず、兵杖を遁る者は皆深谷へこそ落入けれ。前に落す者は今落とす者に踏殺され、今落す者は後に落す者に押殺される。……』



●砺波の関
Tonami Barrier Station
焼大刀を　砺波の関に
明日よりは守部遣り添へ　君を留めむ
（万葉集）
越中国守　大伴家持は最高の賓客である東大寺の占墾地使僧平栄らを饗し、その時歓待の歌を詠んだ。

●芭蕉句碑
Stone inscription of Haiku by Basho
義仲の　寝覚めの山か　月悲し
数々の史跡、句碑も多い古戦場は県定公園にも指定されていて、見どころ、楽しみどころも多い。

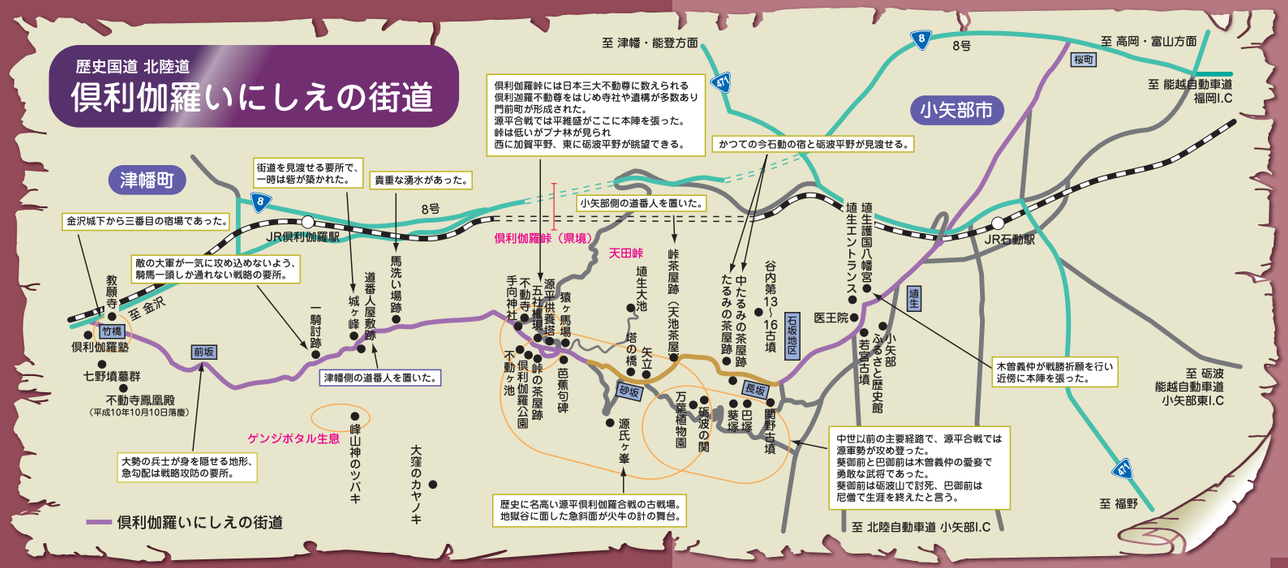
●倶利迦羅さん八重桜祭り（4月下旬）
かつての源平合戦の地も、春には7000本あまりの八重桜が山々を桃色に染め、八重桜祭りにはたいへんな賑わいをみせる。

●葵塚

●巴塚

●倶利伽羅 源平の郷埴生口
Kurikara-genpeinosato Hanyu Entrance
縄文時代からいろいろな役割をはたしてきた倶利伽羅峠について、見て、触れて楽しく学ぶことができる、夢と感動がいっぱいの遊学塾。

●埴生護国八幡宮 Hanyu Gokoku Hachimaugu Shrine
源義仲が戦勝を祈願したことで有名。祈願文が今も残っている。約1300年の歴史を有し、国指定重要文化財となっている。

つわものどもが夢のあと

寿永2年（1183）信州の木曽山中で兵を挙げた源義仲は、10万の兵を率いて京都から下った平維盛の軍と倶利伽羅山で対戦。義仲は中国の故事による火牛の計を練り、5月11日の夜半、総勢4万余騎にて一斉攻撃を開始。ほら貝を吹き、太鼓を鳴らし、鬨の声をあげながら火牛を放って突撃。京都からの長途の行軍に疲れまどろんでいた平軍は、寝ぼけて暗闇の中をあわてふためき、戦意を失って右往左往するばかり。将兵は軍馬もろとも地獄谷の底に駆けこみ落ちて、相い重なって谷を埋めた。その数は1万8千余騎であったと源平盛衰記に記されている。